■反射炉跡

大砲を鋳造するために鉄を溶かした西洋式設備の跡。島津斉彬がオランダの書物を頼りにして造らせた。現在は基礎部分だけが残っている。奥の石積みがその跡で、右手にあるのは、かつての姿を縮小再現したもの。

仙巌園トリビア　右は猫神。島津義弘が朝鮮出兵時に7匹の猫を連れて行き、猫の目を時計代わりとした。そのことから時の神様として猫を祀っている。左は桜島の火山灰。民間事業者によって使い方はそれぞれだが、最終的には廃棄物処分場などで捨てられている。

■尚古集成館本館

1865年に建てられた機械工場跡を使って島津家の歴史と近代化事業を紹介している。建物自体は150年前のもので、現存する日本最古の洋式石造建築物である。外壁はレンガの代わりに溶結凝灰岩を用いており、人の手で削ったとは思えないほど水平に削って積み上げられている。この建物も世界遺産に登録されている。

■水力発電用ダム跡

島津忠義が造らせたもので水の落差によって発電を行い、それを御殿などの照明に利用した。

今も仙巌園に隣接する工場では薩摩切子づくりが行われている。薩摩切子は江戸切子と違って、より細かい細工や表面に色ガラスを厚くつけたものが多い。薩摩切子は欧州のカットグラスを模範にして色被せをボヘミアガラスや乾隆ガラスから学んだようだが、当時のものには日本的繊細さが出ていたといわれる。

仙巌園内には、奇岩・千尋巌や琉球国王から献上された楼閣・望嶽楼など見所がたっぷり。天下に聞こえた名庭園だけに景色がよく、島津斉彬や久光はここから花火を楽しんだという。明治になって島津久光が自分の思う世にならず、やけになって花火を上げたとの逸話があるが、それがここかどうかは定かではないようだ。

庭園美を愛でながら、

明治維新150年！ 動乱期の人物伝を伝える鹿児島のまち

日本の近代化について思う

■仙巌園

仙巌園は万治元年(1658)に島津光久が別邸として設けたもの。桜島を築山に、錦江湾を池に見立てた雄大な庭園である。15,000坪の庭園に、島津斉彬が集成館事業の拠点を造り、近代化への礎を築いた。園内の反射炉跡は、世界文化遺産にもなっている。桜島と錦江湾が一番美しく見えるという御殿は、維新後に島津忠義が住んでいた所で、彼が使用していた部屋や世継ぎのための部屋などが残っており、その頃の風情を伝えている。

所 鹿児島市吉野町9700-1
☎ 099-247-1551
時 8:30～17:30　休 無休
¥ 大人(高校生以上)1,000円、小中学生500円
御殿共通券は大人1,600円、小中学生800円
＜アクセス＞鹿児島中央駅から車で20分、まち巡りバス、カゴシマシティビュー「仙巌園前」下車すぐ

なぜ、薩摩が幕末・明治の原動力になったのか

幕末の主役は薩摩と長州で、この二藩が時代を回天させたといっても過言ではない。日本の南端にある薩摩藩がその主役となりえたのは独特の教育方法と財力、そして先の時代を見る眼にあった。25代島津重豪（しげひで）は閉鎖的だった藩政を改革し、藩校造士館や演武館を設立、〝蘭癖（らんぺき）〟（オランダかぶれ）と噂されるほど開化政策を取っている。ただ、豪奢な事業により財政は困窮を極め、500万両の負債、年間利子60万両という途方もない額を背負った。重豪がその財政を立て直すのに起用したのが茶坊主あがりの調所広郷（ずしょひろさと）である。調所が行ったのは、いわゆる借金の踏み倒し。250年の年賦返済で無利子償還という無茶な通達を商人に出している。調所はこうして借金を踏み倒しに近い形で一方的な発令を行うとともに、物産にも注力し、大坂の商人と協力して黒砂糖の専売強化を図ったり、琉球を通じて清（中国）とも貿易を盛んに行っている。当時は鎖国の時代で外国との交易は長崎に限られていたが、その補助的なものとして琉球を通じた貿易を認めていた。薩摩はそのルートを駆使しながらさらに「密貿易」も拡大しており、そのことにより多大な財力を手にしていたのだ。これが幕末の活動の原動力になったのは言うまでもない。

重豪のひ孫で藩主に就いた28代島津斉彬（なりあきら）は、名君と称され、松平春嶽、伊達宗城、山内容堂とともに幕末の四賢侯に挙げられる人物。斉彬は幕政にも提案を行い、老中・阿部正弘に幕政改革を提案。黒船来航以来の危機を打開するのは公武合体策しかないと主張した。藩政自体も改革し、富国強兵に努めて洋式造船、反射炉の建設、地雷・水雷・ガラス・ガス灯の製造などの集成館事業を興している。

集成館とは、磯の仙巌園にあるもので、日本初の工業地帯と考えてもらえればいい。斉彬は、欧米がアジア各国を植民地化していることに危機を募らせ、島津の別荘（仙巌園）のあった磯地区で紡績、大砲鋳造、造船といった近代化を進める事業を興したのだ。仙巌園の学芸員・岩川拓夫さんは「斉彬時代はこの地は別荘扱い。踊りや舞いを見たりして民衆との交流を図る場でした」と説明し、斉彬の偉業を教えてくれた。斉彬はまず竹林を開いて工場群を建設。この場所が海に面しており、海上輸送に適していたり、背後に山の急な斜面があるため、その利を用いて水車の動力が使えるといった好要因があったのがその建設理由だそう。これに加えて仙巌園はおもてなしの場として利用されていたので、来訪者に近代化工場群を見せる狙いもあったのだという。集成館事業により薩摩は急速な近代化に成功。このことに